

我孫子の景観を育てる会

# 景観あびこ

ホームページに掲載されています。

<http://abikoikeikan.g1.xrea.com/>

創刊 2002/3/29

## 我孫子景観基礎研究3 その1：身近なデザインの潮流と都市景観のつながり-6

### 6-1. レマン湖畔のフレディー・マーキュリー像

今夏、スイスを旅行した。チューリッヒから入国し、サンモリッツを回ってツェルマットからゴルナーグラートに移動して名峰マッターホルンを観た。さらに、シャモニーからエギーユ・デュ・ミディ展望台に登り、モンブランを観た後、ジュネーブ、モントルー、インターラーケンを経て、クライネシャイデックでアイガー、メンヒ、ユングフラウを一望して再びチューリッヒに戻る。約8日でスイスをほぼ1周する旅だった。今回、初めてのスイスで「山岳観光を体験してみたい」との思いで出かけたが、途中の街々で見た湖畔の景観もそれぞれ興味深かった。

スイスは、湖と河川が国土の4%を占める。湖が約1500カ所、河川が距離にして約6万1000kmあるそうで、ヨーロッパの水源として飲水の約6%を担っているらしい。日本の国土378,000km<sup>2</sup>に対し、スイスの国土が41,280km<sup>2</sup>。約9倍の面積差がある中、日本の湖数は、人造湖532、天然湖89、ハイブリッド湖9カ所の合計630カ所となる。

スイスに湖が多い理由は氷河の侵食によるものらしく、最終氷河期に形成された氷河が山を削り取って窪地をつくり、そこに溶けた氷河の水が流れ込んだことによる。



写真1：スイスで見た温暖化の現況／左：ゴルナーグラートの氷河。10年前は一面に広がっていたらしい・右：麓の町の水路。濁流のように溶け出した氷河が流れ込む

現地では山頂付近の氷河から溶け出した水が斜面を下り、河川に流れ込む過程を見た。温暖化の進

### 野口 修(建築家・工学博士)

行で年々失われる氷河が増えているらしい。山頂付近では、10年前の写真にあった氷河が溶けて黒い土が覗いていたり、麓の町の水路には山からの水が音を立てて激しく流れ込んでいた。

話を戻して湖畔の景観と言えば、面積が大きいこともあって同じ湖の湖畔であっても印象が随分違った。例えば、同じレマン湖を共有するジュネーブとモントルーは大きく印象が違った。簡単に言えば、雑然とした印象のジュネーブに対してモントルーの湖畔は美しく整備されていた。

スイス第2の都市であり、国連の各種機構が集まる世界都市でもあるジュネーブと、湖畔の保養地的なモントルーを比較してもと思ったが、ジュネーブの湖畔では、雑然と乗り捨てられた自転車を整理するなり、散乱したゴミを回収するなり、もう少しやりようがあるのではないかと思った。

一方のモントルーは、ジャズフェスティバルで有名な街だが、音楽祭を前面に出した場所づくりができていると思った。

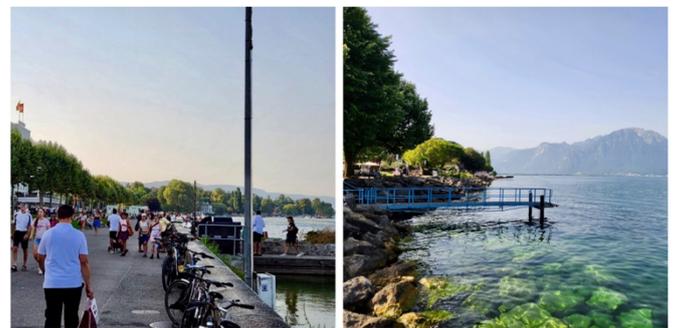


写真2：ジュネーブ（左）とモントルー（右）におけるレマン湖畔の歩道

ところでイギリス・ロンドン出身のロックバンド、クイーンのファンである筆者は、かねてよりモントルーのレマン湖畔に建つボーカリスト、フレディー・マーキュリー（1946～91）の銅像を訊ねたいと考えていて今回実現した。

また、銅像からの徒歩圏内にクイーンが所有した「マウンテン・スタジオ」を改修した体験型記念館「クイーン・ザ・スタジオ・エクスペリエンス」（2013～）も公開されており、ここも観ることができた。

クイーンは、マウンテン・スタジオを1979年～93年まで所有し、7枚のアルバムをレコーディングしたとされる。このスタジオでは、HIVに感染したフレディーが死の目前までレコーディングを続け、遺作となった「メイド・イン・ヘヴン」（1995）のジャケット写真にはレマン湖の風景が写っている。



写真3：フレディ・マーキュリーの銅像とレマン湖畔の景観  
朝早い時間だったので、銅像前で写真を撮れたが、スタジオで見学を終えた際には行列ができていた



写真4：スタジオ・エクスペリエンスの展示と内部の様子

そういえばイギリス出身のハードロック・バンド、ディープ・パープルの代表曲「スモーク・オン・ザ・ウォーター」（1972）は、スタジオ・エクスペリエンスが入っているカジノの前身が火事になった状況を描写した曲で、レマン湖上に漂う煙と燃え上がる炎を表現した歌詞が曲のサビになっている。何とも話のネタは尽きないが、前述した通り水辺にも近く、育った樹木が木陰を作る様子がなんとも涼やかで、夏場でも気持ちの良い場所だった。

湖畔と銅像は、よく聞く取り合わせだ。レマン湖のフレディー像のように、その場所ゆかりの人物を題材とする例もあれば、日本における東北・田沢湖に建つ金色の女性像「たつこ像」のように伝説を題材にした例もある。また、十和田湖の乙女像は製作者である彫刻家、高村光太郎の傑作として知られた例だ。

水辺の銅像は身近な手賀沼湖畔にもあって、水の館前の河童像や、最近では三樹荘の向かいに建てられた嘉納治五郎の銅像が記憶に新しい。

筆者としては当会の設立メンバーであった富樫さんが、手賀沼・久寺家線が新設される際、八坂神社から手賀沼公園に下る公園坂通りとの合流部分に小さな三角形のスペースができることを指摘して、「ここに白樺派の3人衆（武者小路実篤・志賀直哉・柳宗悦）の銅像を建てるべきだ」とおっしゃられ、妙案だなと思った記憶がある。

## 6-2. スイスの観光デザイン

今回、スイスを観光して名峰と呼ばれる山の頂上ギリギリまでロープウェイや山岳鉄道が整備されていることに驚かされた。

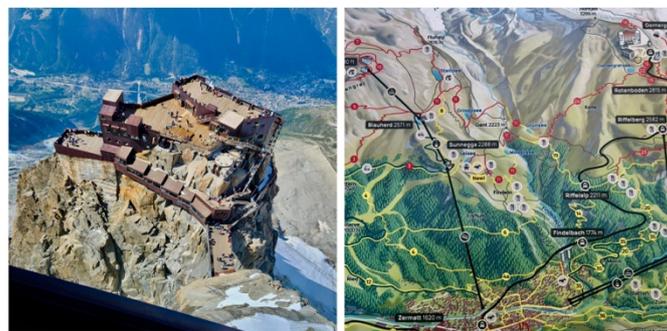


写真5：スイス山岳観光のロープウェイや発着所の施設



写真6：マッターホルンの風景とモルゲンロート（朝焼け）



写真7：クライネシャイデックから見たユングフラウと展望施設内の氷河トンネル

まさに富士山の9号目付近までロープウェイが整備されているような感覚で、歩いて登るのが難しい子供や高齢者、車椅子の方でも“平等”に麓の街から雪渓や氷河が残る高度まで運んでくれる。

現実の富士山でこうした整備が為されない背景としては、活火山であることに加え、西洋との自然観の違いが感じられる。

ここでの自然観の違いとは一神教であるが故に、神が創った自然を「制御」することが人類進化の道と捉えた西洋の思想に対し、多神教の東洋では全ての自然

物や事象に神の存在を信じて敬い、そのままの自然と「調和」する道が選ばれている点では無いか？

そう考えると、今回の旅で観た山岳鉄道やロープウェイ、断崖に建設された施設群などは、自然を「制御」する装置として、危険な工事だったと思われる場所にも建設され、麓と変わらない環境で滞在できる設備が備わっている点にも納得がゆく。

つまり、「制御」され、デザインされた非日常的な景観を楽しむ思想が、スイスにおける「山岳観光」の根底にあるのだろうと思った。(続く)